

ごめんね 【高学年4 - (5)】

- 家庭との連携を図った取組み -

(1) 主題名 家族の幸せ [4 - (5)] 関連項目 [3 - (2)]

(2) ねらい 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立とうとする心情を育てる。

(3) 資料名 「ごめんね」

(4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点
導入	1 普段の家族との過ごし方を発表する。	今まで、家族の言葉で「うるさいな」と感じたことはありませんか。	資料に入る前に、さなえの気持ちを感じ取りやすくするために、個々の体験を共有する。
展	2 資料を読む。 3 見えなかったお母さんの気持ちを知ったときのさなえの言動を考える。	「お母さんなんか大きい」と言ったさなえの心を考えてみましょう。 ・いちいち子どものように言われていやだ。 ・私の気持ちを考えてないんだ。 さなえは、「お母さん・・・」のあと、どんな言葉を言おうとしたのでしょうか。 ・お母さん、お母さんの気持ちがわからずにごめんね。 ・お母さん、私のことをこんなに思ってくれてありがとう。 ・お母さん、もっとお母さんのこと考えてお手伝いするよ。	さなえの満たされない思いとわがままな思いに気付かせる。 その場面の雰囲気を感じながら発言できるように、教師が前文を読む。 「さなえは、読んでいるうちに、～」(資料後ろから3行目)
開	4 自分の生活を振り返る。	「心のノート」に書いてあるように、自分の成長の陰には、おうちの方の温かい心があります。自分の生活を振り返ってワークシートに書いてみましょう。	振り返りがしやすいように、事前に「心のノート」P65を書いておく。 ワークシートを用意する。
終末	5 「心のノート」P89を静かに読む。	読みながら、おうちの人の姿が心にうかぶといいですね。	ことばを味わい、余韻をもって終わる。

「うんね

「お母さんなんか大きい。」

「お母さんは今、何が何が、お母さんの悪いことが何が何がい
やがしこのはわかつてこます。でも、早く起きなさい。」から始めて、早く学校へ行く
準備をしなきや。」「のんびりしていぬと、学校が始まつわよ。」と次々、声をかけ
てくるのです。いつも、朝、飯を食べる氣持ちにもなつません。

「やつこ。学校へ行へ。」

「毎日、かんかをすすみつこし、家を飛び出しこるやなえです。
友だちのおつわのお母さんせ、やれしこだひつな。お母さんにて、わたしの氣持ちを
全然わかつてこないんだか。」

やことひを思つただけで、ふんふんしてくわなえでした。

「おさよが、おなべ。なこが」お母さんなめね。何かあつたの。」
なかよしのよつうが声をかけてきました。

「聞いてよ、やつこ。お母さんたが、朝起きてから寝るまで小音ばかり。いつもね
てかなわなこのよ。せつとこしてれねばここの。」

「やつこ、いつもせつとよ。服を買つときだつて、それまでだつて、いつかのせつこの
じておきなこことか、何にもわかつあやこなこによ。」

「じつも同じだ。こんな親をもつとトゞむが苦労するわよ。」

「おとなぶつて話をじてこねじ、こつつの間にか心が落ち着いてこまつた。」

学校から帰つてみると、お母さんがこませ。おなかがすいたので、おやつを探つてこ
る。たなからじて、ハートが落ちてきました。

「あれ、何のハートかな。」

じのやこてみたが、こんな子が田んびりこじれました。

【 いのとね。おなべ。】

ひなべが、自分の心配があつたのぞ、じりりとつまつした。

さなえは、病氣で生まれました。だからお母さんは、あなたを生んだときから、は
なればなれにならなければいけませんでした。生まれたばかりのあなたをだいて、お
乳を飲ませることもできます、お母さんは泣いてばかりでした。
でも、病氣のあなたは、毎日お母さんをして、いたい手じゅつも受け、一生けんめ

い生きています。お母さんもがんばらなくてはいけませんね。手じゅうのあとのおかを見たびに、お母さんもがんばります。代わるものなら代わってやりたいこと思っています。幸せでいてほしいのです。病気の苦しさを味わわせて、ほんとうに「あんね」と心から思っています。

そんな出だしの後に、入院中の点滴の量や飲んだお乳の量が記録してあり、小さいころのさなえの入院記録が続いていました。

また、初めてつた歩きをしたこと、小学校に入学した時の「じ」、一年生で作った工作のことなど、さなえでやされた記録が、お母さんの手で、ていねいに書かれていました。

さなえが、読んでいたり、二つの間にか、なみだが出てこました。そして、「お母さん・・・。」といつづらせていました。



活用に生かすための実践報告

「ごめんね」

1 主題の設定

家族は、人が生まれて初めて所属する集団である。また、家庭は、子どもにとって、温かい愛情で保護され、慈しまれる場所である。

家族とともに、そばにいるのがあたりまえのように生活していると、目に見えない広く深い愛情や自分に寄せられる愛情に気付くにくいものである。また、家族への甘えや、自己中心的な考え方で、家族の幸せを考えない言動をとることもある。

本資料は、母の忙しい毎日を知りながらも、日常的に出てくる母の言葉をうとましく感じているさなえが主人公である。偶然見つけた母の古いノートから、母の深い愛情に気付くという内容である。

心から自分に寄せられる愛情に感謝する気持ちは、家族の幸せを考えて、進んで役立ちたいと思う気持ちの原動力になるとを考えた。そのような気持ちの持てる契機になることを願っている。

2 指導過程の工夫

「心のノート」は、自分の生活を振り返るときに活用していく。そして「心のノート」を記入するために、事前に家族と話し合うことで、家族に支えられている自分を感じ取りながら学習が進められるようにした。

自分の生活を振り返るところは、自己との対話を深めるためにも、書く活動を取り入れた。

終末では、「心のノート」P 8 9 を静かに読むことで、余韻をもたせて終わるようにした。

3 発問の工夫

「さなえは『おかあさん、・・・。』のあと、どんな言葉を言ったのでしょうか。」という中⼼発問に対して、素直な気持ちが出しやすいように、教師がナレーター役をする。つまり「さなえは、読んでいるうちに、いつの間にか、なみだが出ていました。そして」までを教師が読み、その後「お母さん、」と言うように、児童にさなえの言葉を語らせる。

4 児童の反応（授業後の感想）

- ・よく思うと、お母さんにありがとうということは、いくらでもある気がします。おこられても自分を思っている気持ちからなんだと分かった。お母さんが大切だ。
- ・私も、「お母さん大きい。」「うざいな。」と思うことはあったけれど、自分の事を思ってくれていると思うと、「ごめんなさい。」と言いたくなりました。
- ・お母さんがわかってくれないんじゃなくて、自分がわかっていないと思った。
- ・お母さんが、私のこと一番わかっているんだと思った。

5 実践者からの一言

書く活動では、高学年ともなると、家族から日常してもらうこと以外にも、精神的な悩みを相談して一緒に考えてくれたことや自分を受け止めてくれていることに感謝している内容が見られた。

表面的な会話や日常生活では気付くにくい「家族の愛情やすばらしさ」を「心のノート」の詩で味わい、余韻を持って終わることがよかったです。